

今回は、明治から大正にかけて最も有名な小説家の一人である夏目漱石の佐々木東洋人物評とも言うべき文章が二つありますので紹介します。

一つは、明治41年、漱石が45歳の時に書いた「處女作追憶談」、もう一つは、大正3年、漱石が51歳の時に学生を対象として講演をした記録です（旧仮名遣いは現代に直してあります）。

「處女作追憶談」の一部を引用すると、「困ったことには自分はどうも変物である。当時変物の意義はよく知らなかった。然し変物を以て自ら任じていたと見えて、とても一々此方から世の中に度を合せて行くことは出来ない。何か己を曲げずして趣味を持った、世の中に欠くべからざる仕事がありそうなものだ。一と、その時分私の眼に映ったのは、今も駿河台に病院を持って居る佐々木博士の養父だとかいう、佐々木東洋という人だ。あの人は誰もよく知って居る変人だが、世間はあの人を必要として居る。而もあの人は己を曲ぐることなくして立派にやっけて行く」。

講演は「無題」とされていますが、その中で、「まだ子供のとき、財産がなかったのに、一人で食わなければならないという事は知っていました。忙がしくなく時間づくめでなくて飯が食えるという事について非常に考えました。然し立派な技術を持ってさえいれば、変人でも頑固でも人が頼むだらうと思いました。佐々木東洋という医者があります。此医者が大変な変人で、患者をまるで玩具か人形の様扱い愛嬌のない人です。それではやらないかといえは不思議な程はやって、門前市をなす有様です。あんな無愛想な人があれだけやるのはやっぱり技術があるからだと思いました」。このように、両方の文章で佐々木東洋に関してほぼ同様なことが書いてあります。

一方、「杏雲堂病院百年史」の中には、漱石の話を書き添えるようなエピソードがいくつか載っています。東洋は医学を天職と考えていて、日々診療には極めて厳しい態度で臨んでいたようです。当時の大金持ちに往診に呼ばれても態度などが悪ければ行かない、命じたとおりに服薬しない患者には治療を拒否することがあったそうです。入院患者の我が儘などは決して許さず、ある時患者が食事が不味いと言ったら、「ここは料理屋ではない、旨いものが食べたかったらさっさと退院したらいい」と怒ったことが書いてあります。このように、こわい医者で患者は叱られてばかりいましたが、漱石が言うように患者は次々と診療を受けに来ていたのです。それは東洋が医者として腕がよく、強い責任感を持っていることが知られていたからだとのこと。現代の医療を東洋が見たらどのように批評するのか、とても興味があるところです。

漱石が「處女作追憶談」を書いた当時は、小説家となることを決心し、東大講師を辞め日本初の朝日新聞社所属小説記者の道を歩み始めた頃です。漱石は、学生だった頃に将来の道を色々と模索していましたが、自分が変物であることを自覚しており、かつそのまま世の中に欠くべからざる仕事がないだろうかと考えていて、佐々木東洋のことに思いが至ったわけです。これを書いた明治41年と言えば、杏雲堂病院が開設されて以来既に26年目となり、東洋は古希を迎え院長職を10年ほど前に養子の佐々木政吉に譲っていましたが、依然として東洋の話は人々の記憶に強く残っていた証拠を示す一つの事実だと思えます。

(なお、「處女作追憶談」全文を現代日本語で記載したものが、インターネットサイト青空文庫に載せてあります)。